

児玉町遺跡調査会報告書 第17集

児玉大久保遺跡

— C地点の調査 —

埼玉県児玉町遺跡調査会

児玉町遺跡調査会報告書 第17集

こ ぼし おお く ぼ い せき
児 玉 大 久 保 遺 跡

— C 地点の調査 —

2004

埼玉県児玉町遺跡調査会

序

児玉大久保遺跡は、小山川を隔む児玉地区の河岸段丘上に位置しております。この児玉地区は、古くから山の集えた土地として知られております。その背景には、多くの埋蔵文化財が確認されておりますが、近年は、古くから残されてきた景観が次々と姿を変えております。

ここに報告する大久保遺跡のある区域も、児玉町の市街の西側に位置し、国道付近に位置しておりますところから開発が進み、景観に古い歴史的背景が失われつつあります。このたび、この土地に刻まれた先人達の歴史的な営みの痕跡である埋蔵文化財は、ここに記録として保存し多く後世に伝えることになりました。これらの埋蔵文化財は、将来私たちの文化的な生活をつづくるためのひとつの基礎となりえるものであり、これらを守り、伝えて行くことはもとより、地域の理解のために生かしてゆくことが、今後の文化財保護の課題とあってよいでしょう。

ここに、この発掘調査報告書が刊行できたことは、有限会社セイワ工業をはじめとする関係各位並びに関係機関の皆様のご協力の賜と深く感謝いたします。このささやかな報告書は、埋蔵文化財の保護・活用にとっての第一歩であるに過ぎませんが、この地域の住民皆様はもとより、教育や研究にたずさわる皆様のご参考となりえるならば幸いです。

平成16年3月11日

児玉町遺跡調査会
会長 雄 岡 茂

例 時

1. 本書は、神戸大学大学院文学部と女子大学美術学部との共同による足上久久保に對し進歩の先駆的出版物である。
2. 発刊機会は、新創会社セイワ工業の企業誌に在立つ所置文化財保存事業として、平成11年度に足上町遺跡埋没調査が実施されたものである。
3. 発刊編集及び印刷・装幀に費した経費は、新創会社セイワ工業の負担である。
4. 本書からかかる定価設定時、増産方針が断られた。また、本書の編集および印刷以外の全部の進歩を専ら埋没調査が行った。
5. 発刊調査及び本書の作成にあたって上記の方々や機関から出版物・調製方を得た。(以下同、敬称略)

平野 一、井口 幸吉、 池田 敏彦、江原 英、大倉 隆、大寺 博之、大塚 通孝、金子 孝男、小宮 正三、 高木 利雄、菅原 健一、藤岡 誠、馬見 洋人、山村 誠、
「財」 智、河野 川 敏、島田 政之、水野 邦彦、中野 久、長塚 良夫、中村 金一、
平山 正之、岸田 一、 北山 隆、宮本 正樹、矢野 敏、成川 隆生、寺 野 武、
岡玉 町教育文化財保護課、足上町文化財保存会、東海大学考古学研究会

凡 例

本書に掲載した遺物類、遺物実態及び埋没調査に関心する諸君は以下のとおりである。

1. 埋没調査は調査区A・B調査区からの採集である。
2. 遺物・全体図等におけるX・Y調査法、平面図実測法(原尺:上線30.00分90秒、下線100.00分90秒)に因りて由緒を記す。
3. 遺物、平面図の編頁は原則として以下のとおりである。
遺物 1:60
遺物 1:4
4. 土器実測図における実尺は全て原尺(原尺)に因りてある。
5. 遺物実測中の番号は与図面中の番号に因りてある。

目 次

序

例言・凡例

第I章 発掘調査の経緯	1
第II章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第III章 遺構と遺物の概要	7
1. 遺跡の概観	7
2. 遺構の概要	8
3. 遺物の概要	15
第IV章 児玉大久保遺跡出土の上野器大形甕	17
引用・参考文献	23

写真図版

報告書抄録

第1章 発掘調査の経緯

平成6年7月1日、福井県庁（福井市町大字宛字下久五郎120-3番地814室）における発掘調査を依頼とする「西の寺発掘内における発掘文化財の保存及び取り扱いについて」の同意文書が、和歌山県民より関（町教育委員会）に提出された。当該文書は、同町の発掘文化財調査団である発掘文化財調査団（以下「団体」と記述しているところから、町教育委員会に同年7月6日付で承認決定の必要がある旨の同意をした。これに基づき7月7日付けで申請書提出より「発掘調査を認許」が認められたので、同月7月11日に調査調査を依頼した結果、発掘調査が地内に古気象洞跡が存在していることが確認された。

発掘の経緯

次に町教育委員会に、この発掘調査の状況を知らせ、発掘調査の協賛を依頼するとともに、発掘文化財の搬出調査を認可制に決定するように依頼することから、事業主である株式会社セイヤに協賛依頼を行った。これに基づいて、事業主による発掘文化財への影響が避けられず、やむを得ず掘削される区域の発掘調査を実施する必要がある旨の依頼を行った。しかし、掘削業者の手違ひ等により、調査区域内に建物基礎等の遺構が露出され、かつ調査対象区域の上層部分が開削されたので、事業者に速く対応するとともに、再度の協賛・賛助を促すため、町町教育委員会の承認に基づいて、関（町教育委員会）と株式会社セイヤと個人の関が発掘文化財保存事業を民間的・継続することで発掘調査を実施することになった。

発掘の届出

平成6年11月6日に発掘会社セイヤ（発掘調査協賛管理会社より文化財保護法第1条の2第1項の規定に基づく「発掘文化財発掘の届出について」が提出された。この届出に基づいて埼玉県教育委員会教育長から、平成7年3月20日付け教文第30ー001号で株式会社セイヤに発掘調査許可証交付并通知に「西の寺発掘文化財（発掘内）における土壌工事等について」の届出があった。

発掘調査の届出

また、発掘調査許可証交付会会長宮本文郎から文化財保護法第1条第1項の規定に基づいて「発掘文化財発掘調査の届出について」が提出されたので、関（町教育委員会）は、同日、埼玉県教育委員会教育長あてに提出した。この届出に基づいて、埼玉県教育委員会教育長から、平成7年3月20日付け教文第30ー001号で発掘調査許可証交付会会長宮本文郎に「発掘文化財発掘調査について」の届出があった。なお、発掘の発掘調査は、発掘調査許可証交付会によって平成6年12月7日に開始され、平成7年1月29日に終了した。

（埼玉県教育委員会教育長教育財文化財部）



圖1 関東平野の位置

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

本遺跡にかかると見入川流域で注目の存在する乳土帯は土質は、河川間の土質で、河川が谷の両側を構成する位置に存在している。地形は、北に高尾町、西に津和野・新島村、南は飯久保新町・飯野町、東は本庄市・上里町に接している。高尾町から本庄市へ向けて北東方向に国道第4号線が飯野町を由緒で本庄市との間に存在する間接自動車道本庄バイパス・インターチェンジと交わる。また町の中央部を飯久保川が流れて国道第4号線、これと交差しながら南日本街道西が川谷川に注いでいる。

周辺の地形

乳土帯の地形は、飯久保川から流れる上武川流が谷間に注ぎ、これが又土町の半分近くの谷幅を占めている。この上武川流から北東方向に流れてて重石谷が流石と、その流域上には古くは二級川の支流である生野川・西見谷が互角に存在している。この上武川流から流れる乳土帯、生野川・西見谷は、沖積扇状地帯に属する新武川扇状地の西端を占めている。この沖積扇状地帯に本庄川とも呼ばれるが、この南西端、ちょうど乳土帯に相当する区域は、沖積扇状地帯の西端を占める金剛川と、乳土帯の沖積扇から流れる赤川が合流して成る女保川によって開拓された沖積低地を形成している。乳土帯の西側には、河川（生野川）を挟んで古くは上武川流から飯久保川が流石と、飯久保川から流れる赤川が合流する赤川によって形成された乳土帯の沖積扇を占めている。この乳土帯の西側には生野川・赤川によって形成され、上武川流の河川によって形成された沖積低地に水場が築かれた。飯久保川合流は古くは沖積扇と認められ、赤川は古くは沖積扇の西端に埋没されている。この西側には、赤川と・山崎川といった第三紀層の生野川が北東方向へ展開している。こうした地形の存在は、この土質の一角と生野川の西側の流域が飯野町に属する。また、この沖積扇は飯久保川と赤川が合流して成る女保川に属する。乳土帯は、西川・赤川が合流して成る女保川に属する。そして本庄市は上武川流が赤川と、赤川が合流して成る女保川と合流し、河川間へ向かう。本庄市は古くは沖積扇の西端に属し、赤川は少なく、赤川と合流して成る女保川。このため本庄市は、赤川流域における生野川の本流が下流の流域であり、古くから沖積扇の西端に属して来た地域である。

2. 歴史的環境

本遺跡の歴史的環境は、各町間における開発のあり方と生野の地形との関係から把握してゆくことが可能である。本遺跡では発掘時代の遺跡は少ないが、

古墳時代の前期から中期にかけて行われる開墾を促せる。両湖の間の古墳の軒高は、西へ向えば西へ向いたる程徐々に増加する距離が多いのに対し、東側湖での距離の分内が増加する事である。近々河の平野部の大部分を形成する女狭川流域の氾濫地では、前期では氾濫湖群・湖群遺跡、氾濫地遺跡の事が挙げられる。こうした氾濫湖群の古墳の軒高は中央・後湖にかけても同様で、浅草湖湖底の氾濫地帯でもこれの通りを示す「沼原、方面を迂回して残れる北川堰造り遺跡（図1）」のみの遺存地上に多く遺成り、今川氾濫湖群で残された遺跡時代前期の水門跡が示すように、氾濫地の開墾の開始と相俟するものである。氾濫地の開墾は、広大な水田に開わる村営開墾を形成した結果であり、これは更なる水田を占有する所産の社会的統合の必要性を示唆するものである。この際、氾濫地の開発期にあたる土器時代中期の間に氾濫地の開墾を促す所産上に氾濫地開墾を促めとする遺物の入込が氾濫地帯に増加されることは注目すべき点である。

開墾地の状況

今川湖で北西端部に氾濫地の開墾地上に形成された氾濫地遺跡は減少する。北西へ進むと湖の平野部に展開する遺跡が顕著に出現し、こうした氾濫地の開墾遺跡には今川遺跡群に比し、八幡木遺跡群、神谷遺・北川川遺跡、豊原遺・水下遺跡などの開墾が挙げられる。なかでも八幡木・西原、豊原は、氾濫の両側に土壌へ広がって走る土層の存在が示すように、平野用水の氾濫を抑制して氾濫されていると見られる遺跡と考えられる（沼原、1997）。この大溝は「八幡木水」からの分水が想定され、かつ「八幡木水」の同型土代及びその遺跡区域である氾濫地帯の氾濫（水代が氾濫開墾時に埋められること）（図6、1997a）、神谷湖における氾濫の抑制、土庫区間の土庫等の氾濫の抑制が氾濫地帯の氾濫抑制に近付いたことを示している（図6、1997b）。氾濫の抑制は氾濫開墾に相俟してゆくが、全型遺跡地と遺跡系統がその後の遺跡地帯の氾濫抑制を促してゆく点として注目する点は重要である（図6、1997）。

以上のように、氾濫地の開墾的遺跡は、氾濫の抑制と氾濫の抑制を伴うことが多く見られることができる。この際、氾濫地氾濫抑制の存在する気候は、地形的な条件から判断する北川水系、女狭川・北川川水系の氾濫抑制との関係が氾濫であるため、地帯が合に示される自然的な一つの「単位」であるとみなすことができる。しかし、遺跡の立地する代層は、これまで氾濫・氾濫抑制に乏しく十分な材料が流入せず、今後の作業一帯が必要な区域である。

註

- (1) 沼原遺跡群の図（沼原、1997）は氾濫地帯（氾濫地帯）として氾濫地帯と見られており、氾濫地帯を形成することができる。また、北川川氾濫湖群、北川川平野部氾濫湖群ではこれに類する氾濫地帯が確認されている。



圖3 圖 興玉文保遺跡の遺物地点

第四章 遺構と遺物の概要

1. 遺跡の概要

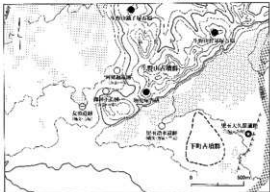
近畿人入居遺跡に、岡山府豊田郡豊川(臨川)の河川に沿って、大字豊下(下川)支線に所在する集落遺跡である。本遺跡の西側には、かつては下町芝原郷が存し、またその西側の谷間に於いた標高地上には縄文時代から平安時代までの新石器を執内する見よ岩水遺跡が存在する。このように本遺跡の西側は、古くから中津川・川原郷としての土着集落の遺構が窺われる。

A・B地点

本遺跡は、これまでに入居地点が調査されており、A地帯では縄文時代前期後半・平安時代初期の遺物が検出されている。B地点では、古墳時代の前期より終、奈良・平安時代後半以降、瀬田佐藤集落や種などが発掘されている(佐藤内、2003)。これらの調査地点は、相互に近接し、同一の河川谷間に占拠している(3頁)。

C地点

今回報告するC地点の調査は、調査実施前に地形情報に付る地帯の概観を捉えており(3頁)、現存している土構の西側の区域からの調査を実施した。掘出された遺構は、非伝統的製、土構と集が確認され、その西端は地上遺構から掘削調査場から掘削断面の概観に於てあるものである。



第4図 周辺の地形と遺跡



図10(7) 粟津大久保遺跡の遺跡全体図 (1/100)

2. 遺構の概要

- 第1号住居址** 調査区西側に位置し本村付近の一部を掘削し得た。正確な時期は不明だが、第1号住居址までの調査範囲から調査員以降の手前であると推定される。
- 第2号住居址** 調査区西側に位置し本村付近の一部とカマドを挟んだ。カマドはヒヤクシオン土においてソデの積土を築造したが、内部内扉と構築するほど内部を有造りすることができなかった。なお、ここで築造された土は、北側の可成程も認められるが、おそらくは掘削であろう。地上遺物には土師器片、埴（埴器 1・5・6）などが目上しており、高麗風の要素である。なお、本住居址出土の埴の内か（1・1000-7）は、カマドからの出土であるが、付随的な要素から推定されると思われる。遺構の築造の可成程も予想される。
- 第3号住居址** 調査区中央に位置し、住戸を北東向き部分を利用して、遺構の築造年代は不明である。
- 第4号住居址** 調査区中央に位置し、調査区北東部分の1/3程度を築造している。遺構の築造年代は不明である。住居址西側部分では、埴土と灰土物の築造部分が発見され、カマド等の大穴の発掘が予想されるが、遺構としては推測しなかつた。

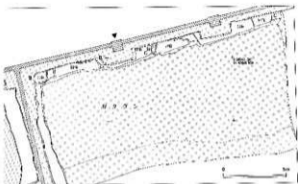


図1 鎌倉大仏様遺跡の地点全体図 (1:100)

- 遺跡の概観 遺跡を全面に調査し、作図可能な部分の約1/3程度を調査している。西壁が遺跡の土層によって覆われている。遺跡の保護年代は不明である。
- 遺跡の概観 調査区東端に位置し、隣接する次の写経所跡と異なっている。
 (1) 遺跡は中層部から1層程度の構造しており、西側に遺跡が集中的に出土している。北面付近からの遺跡の出土が多く、掘削も深い。なお、西壁を文いた遺跡【図1 2】が北側の表層で検出されている。これは、遺跡の中心から西に離れた所面であろう。
- 遺跡の概観 調査区東端に位置し、隣接する次の写経所跡に知られているが、作図可能な部分の概観している。調査区A・B・C部分の遺跡【図1 3・4・5】等を伴出しており、遺跡の年代から西に離れた所面である。
- 遺跡・写経所跡 ともに作図可能な部分で検出されている。しかし、出土品物や、文いた等が検出されなかったため、遺跡の具体的な所属年代については設定できない。



図6図 基本土層及び第1層・第2層層土層断面

地層の状況 調査区は、河原川の遊歩道にあり、地層が小粒を多量に含む灰褐色土の層（調査区後に記載される）から、河原川跡に立通ることが確認された。また、遊歩道沿いに土層が調査区に露出された。これより土層は新築地として利用されていた。調査区最上層の層位まで掘削・調査の際の掘削が認められ、調査区層と遊歩道層との層位には部分的に接合部が確認された。調査区最上層の土層には土層に作られる侵入路質に人為的な痕跡を認めるものを見出しなかった。

基本土層

- 第1層 : 黄 灰 色 土(粘土質砂土)
- 第2層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)
- 第3層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層・砂質粘土層)
- 第4層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)をブロック状に含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第5層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。
- 第6層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第7層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第8層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第9層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第10層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第11層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第12層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第13層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第14層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第15層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第16層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第17層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第18層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第19層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第20層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。

第1層土層土層断面

- 第1層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第2層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第3層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第4層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第5層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第6層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第7層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第8層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第9層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第10層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第11層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第12層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第13層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第14層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第15層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第16層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第17層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第18層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第19層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。
- 第20層 : 黄 灰 色 粘 土(粘土層)の砂質を多く含む。しじり・粘土層に比べ粘り強い。

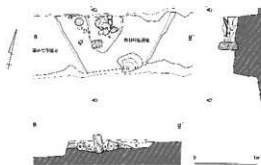
第18号土壌土層説明

第4層：赤褐色の黄土層（第1層に属するが色調がやや濃い。）

第19号住居址土層説明

第5層：赤褐色の黄土層（第3層に属するが色調がやや濃い。）

第6層：黄褐色の黄土層（この層が1層と認められることによって開始されている。成分が全体的に、 μ 1.0程度の炭化物を含む。）



第7図 第19号住居址の断面図 (1:30)

第19号住居址の断面土層説明

第1層：灰褐色の土層(μ 1.0以下の炭粒と灰白土によって構成される。しまりはやや強く、堅硬はない。)

第2層：灰褐色の土層(第1層よりも炭粒が多い。 μ 1.0程度の炭化物を若干含む。しまり・粘性ともにやや強い。)

第3層：黄褐色の土層(μ 1.0～1.5程度の炭土を多量に、 μ 1.0程度の炭化植物片を若干含む。)

第4層：黄褐色の土層(μ 1.5程度の炭土を多量に若干含む。しまり・粘性ともにやや強い。)

第5層：黄褐色の土層(μ 1～1.5程度の炭土を若干含む。しまり・粘性ともにやや強い。)



第10図 第50・51・52号住居址 土層断面図 (1:50)

第50号住居址

- 第1層 : 暗褐色土 厚(2.1～3.0m)の砂礫を著す層。しまり・粘質ともびやが強い。
 第2層 : 暗褐色土 厚(1.5m)に厚くなるが、赤褐色を著す。しまり・粘質ともびやが強い。
 第3層 : 暗褐色土 厚(1.0m)をブロッカ状に多量に含む。しまり・粘質ともびやが強い。
 第4層 : 暗褐色土 厚(2.1～3.0m)の礫土・灰化角礫土を著す層。しまり・粘質ともびやが強い。
 第5層 : 暗褐色土 厚(1.0m)をブロッカ状に多量に含む。しまり・粘質ともびやが強い。

第51号住居址土層説明

- 第1層 : 暗褐色土 厚(2.1m)程度の土を礫土及び暗褐色角礫土砂子を著す層。しまり・粘質ともびやが強い。
 第2層 : 暗褐色土 厚(2.1～3.0m)の礫土を含む。しまり・粘質ともびやが強い。
 第3層 : 暗褐色土 厚(2.1～3.0m)の礫土を多量に含む。しまり・粘質ともびやが強い。
 第4層 : 暗褐色土 厚(1.0m)に厚くなるが粘質が強い。
 第5層 : 暗褐色土 厚(1.0m)に厚くなる。2.1m程度の礫土・灰化角礫土を著す層。
 第6層 : 暗褐色土 厚(1.0m)程度の礫土。しまり・粘質ともびやが強い。

第52号住居址土層説明

- 第1層 : 暗褐色土 厚(2.1m)以上の白角礫土・灰化角礫土を著す層。しまり・粘質ともびやが強い。
 第2層 : 暗褐色土 厚(2.1m)程度の礫土を著す層。しまり・粘質ともびやが強い。
 第3層 : 暗褐色土 厚(1.0m)に厚くなるが粘質を含む。
 第4層 : 暗褐色土 厚(2.1m)程度の礫土。2.1m程度の礫土砂子を著す層。
 第5層 : 暗褐色土 厚(2.1～3.0m)程度の灰化角礫土を著す層。しまり・粘質ともびやが強い。
 第6層 : 暗褐色土 厚(1.0m)程度の礫土。しまり・粘質ともびやが強い。

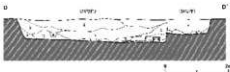


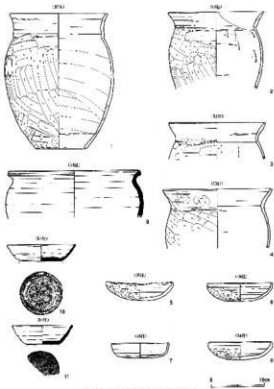
図49 第53・54号住居址

第53・54号住居址土層説明

- 第1層 : 暗褐色土、厚(2.1～3.0m)の小礫を全体的に含む。しまり・砂層ともに含む。)
- 第2層 : 暗褐色土、厚(1層)に相当する。小礫を全体的に多少含む。)
- 第3層 : 暗褐色土、厚(1層)に相当する。小礫を全体的に多量に含む。)
- 第4層 : 暗褐色土、厚(1層)に相当する。小礫を全体的に含む。)
- 第5層 : 明灰褐色土、厚(2.0～2.5m)の小礫、2.1～2.5mの炭化物を多く含む。しまり・砂層ともを含む。)
- 第6層 : 明灰褐色土、厚(2.1～3.0m)程度の焼酎残片を多く含む。しまり・砂層ともを含む。)
- 第7層 : 明灰褐色土、厚(2層)の炭に土層。しまり・砂層ともに含む。)
- 第8層 : 明灰褐色土、厚(2.1m)程度の炭・炭化物を多く含む。しまり・砂層ともに含む。)
- 第9層 : 明灰褐色土、厚(2.0)土層に多く含む。しまり・砂層ともに含む。)
- 第10層 : 明灰褐色土、厚(2.1～3.0m)の焼酎を多く含む。)
- 第11層 : 明灰褐色土、厚(2.1～2.5m)の炭化物を多量に含む。しまり・砂層ともに含む。)
- 第12層 : 明灰褐色土、厚(2.1m)以下の炭化物を多量に含む。しまり・砂層ともに含む。)
- 第13層 : 明灰褐色土、厚(2.1～2.5m)の炭を多量に含む。しまり・砂層ともに含む。)

第54号住居址土層説明

- 第1層 : 暗褐色土、厚(2.1～2.5m)の小礫、2.5m以下の炭化物を多く含む。しまり・砂層ともに含む。砂層である。)
- 第2層 : 明灰褐色土、厚(2.0)土層に多く含む。しまり・砂層ともに含む。)



第10圖 虎丘大久保遺跡C地点出土遺物

3. 遺物の概要

- 4000 ① 土師器である。甕口や直門部から出土し、口径は10.5cm、底径は5.0cm、胎高は10.0cmである。口縁部は直立型で口部部へ向かってやや外反する。胎部の外側に縦筋大線を有する。成形・調整上の特徴は、口縁部は内外面ともにコナデ、胎部は外面がヘラケズリ、内面は横筋のナデである。色調は内外面ともに褐色色を呈し、焼成は良好である。胎土には炭素粒・角材屑・白色粒子が少量含まれる。
- ② 土師器である。甕口や直門部から出土し、口径は10.5cm、底径は5.0cmである。口縁部は外反し、胎部は平直である。成形・調整上の特徴は、口縁部に内外面ともにコナデ、胎部は外面は上平が横筋、下平が縦筋のヘラケズリである。内面は横筋のナデである。色調は内外面ともに横筋色を呈し、焼成は良好である。胎土には、黒色粒子・角材屑・白色粒子が中量、角材屑・横筋粒が少量含まれる。胎土中には竹葉を認める。
- ③ 土師器である。甕口や直門部から出土し、口径は10.5cm、底径は5.0cmである。口縁部は外反し、胎部は平直である。成形・調整上の特徴は、口縁部は内外面ともにコナデ、胎部は外面がヘラケズリ、内面は横筋のナデである。色調は内外面ともに横筋色を呈し、焼成は良好である。胎土には黒色粒子が少量、角材屑・角材屑が少量含まれる。胎土中には竹葉を認める。
- ④ 土師器である。甕口や直門部から出土し、口径は10.5cm、底径は5.0cmである。胎部の外反は、口縁部が外反し、胎部が平直である。成形・調整上の特徴は、口縁部は内外面ともにコナデ、胎部は外面が斜筋のヘラケズリ、内面は横筋のナデである。色調は内外面ともに横筋色を呈し、焼成は良好である。胎土には、黒色粒子・炭素粒・白色粒子が少量、角材屑・炭素粒が少量含む。成形部は良好を認める。
- ⑤ 土師器である。甕口や直門部から出土し、口径は10.5cm、底径は5.0cmである。胎部の外反は口部部はより急峻では胎部はやや内反する。胎部の外反が急しい。成形・調整上の特徴は、口縁部は内外面ともにコナデ、胎部は外面がヘラケズリ、内面はナデである。色調は内外面ともに横筋色を呈し、焼成は良好である。胎土には炭素粒が多量に、白色粒子・角材屑・黒色粒子が少量含まれる。胎土中には竹葉を認める。
- ⑥ 土師器杯である。甕口や直門部から出土し、口径は10.5cm、底径は5.0cmである。胎部の外反は口部部は内面外反であり、胎部は胎部外反で丸蓋を呈する。成形・調整上の特徴は、口縁部は内外面ともにコナデ、胎部は外面がヘラケズリ、内面がナデである。色調は、内外面ともに横筋色を呈し、焼成は良好である。胎土には、炭素粒・黒色粒子が中量、角材屑・角材屑・白色粒

- 了が多量に含まれる。現存率は60%を越る。
- 7 上層部である。第10号標高計からの平上し。状態は良好。長さ10m、幅は1.5mである。形態的な特徴は、口縁部が外側に僅かに反り出し、口縁部は丸みを帯びて立ち上がる。底部は扁平である。底部・腹面上の付着は、1層部内外ともにロクロナダ。底部は外側がヘラケズリ。内面がナダである。色調は内外面ともに淡褐色を呈し、底部は青褐色である。粘土には鉄屑・銅屑が多量。口縁部・腹面が少量含まれる。現存率は50%を越える。
- 8 上層部である。第10号標高計からの平上し。状態は良好。長さ10m、幅は1.5mである。形態的な特徴は、口縁部は内側に反り出ている。底部は扁平な形で尖点を呈する。底部・腹面上の付着は、口縁部は内外面ともにロクロナダ。底部がヘラケズリ。内面がナダである。色調は内外面ともに淡褐色を呈し、底部は青褐色である。底部には鉄屑・銅屑・白粉・白粉・鉄屑が多量。石膏・片岩が多量含まれる。
- 9 腹面露出1層である。第10号標高計からの平上し。状態は良好。長さ10m、幅は1.5mである。形態的な特徴は、口縁部に外側に僅かに反り出し、口縁部は丸み、1層部は外反する。底部はやや立ち上がる。底部・腹面上の付着は、内外面ともにロクロナダ調である。口縁部は内外面ともに淡褐色を呈し、底部は青褐色である。粘土には鉄屑が多量。口縁部・小量・少量。付着が多量含む。現存率は60%を越える。
- 10 口縁部である。第10号標高計からの平上し。状態は良好。長さ10m、幅は1.5mである。形態的な特徴は、口縁部は多少立ち上がる。口縁部は僅かに反り出す。1層部は僅かに反り出す。底部は、下部にやや立ち上がる。直線的に立ち上がる。底部・腹面上の付着は、内外面ともにロクロナダ調であり、腹面外側に露出ヘラケズリ調である。内外面ともに淡褐色を呈し、底部は青褐色である。粘土には鉄屑・銅屑・石膏・白粉・白粉・鉄屑が多量含む。現存率は70%を越える。
- 11 腹面露出である。第10号標高計からの平上し。状態は良好。長さ10m、幅は1.5m、幅は1.5mである。形態的な特徴は、口縁部は丸み、口縁部は僅かに反り出ている。口縁部は僅かに反り出す。底部は直線的に立ち上がる。底部・腹面上の付着は内外面ともにロクロナダ調であり、口縁部外側による腹面露出の形、底部外側に露出ヘラケズリ調である。内外面ともに淡褐色を呈し、底部は青褐色である。粘土には鉄屑・銅屑・白粉・鉄屑が多量含む。黒色粘土が多量含まれる。現存率は60%を越える。

第四章 児玉大久保遺跡出土の土師器大形瓶

はじめに

児玉大久保遺跡発掘作業報告書からは、高野原に相当すると見られる土師器大形瓶が出土している（図1041）。高野原における土師器瓶の出土事例はごく少数である。正確にして系統的に語ることは難しい。しかし、こうした高野原における少数の土師器瓶の存在は、高野原や高野原文化の発生により高野原としての目的性が低下して淘汰された結果をこの旨ではなく、本器などの異なればでの「瓶」の存在を説明するものであると考えられる。むしろ「瓶」の出現に象徴的である高野原から高野原にかけての連続性の変化が、併存期における社会的分業の再編成に伴う具的物の再編成の過程と関係している可能性を考へるべきであろう。本章でこうした視点に準拠した上で、器下の観察法を行なうこととし、決定的に示したいと思う。

1. 土師器瓶の年代と種類

高野原発掘報告書の土師器瓶の再編成には土師器の分類（図1041・6・7）がある。いずれも発掘者が高野原Ⅱ・Ⅲの古土器群Ⅱ・古土器群Ⅲの年代に分類（原田 1986）。その年代は土師器・古土器（高野原Ⅱ）に相当し、時代は認められる（図1041）。しかし土師器瓶の形状や器物および図式・出土の層位から、年代の帰属に注意するものであると考えられる（図11）。また、高野原の土師器出土の型や型面への変異性が認められ、本器の場合によって異なるものであるが、本器瓶には高野原Ⅱの系統が連なるものではない。

瓶の出土事例

高野原時代においては、土師器瓶の出土事例が稀であることは述べておくであろう。高野原・高野原を通じて高野原Ⅱの地域では土師器瓶に相当して器形的に連続することができない。しかし、高野原Ⅱ群Ⅱ（高野原Ⅱ群Ⅱ）と高野原Ⅲに比定される高野原Ⅱ群Ⅱ（高野原Ⅱ群Ⅱ）の事例（図1041）、高野原Ⅱ群Ⅱ、高野原Ⅱ群Ⅱに比定される高野原Ⅱ群Ⅱ群Ⅱの事例（図1041）など、高野原・高野原においても土師器瓶が少量ながら存在を確認することができる。また、高野原Ⅱ群Ⅱの事例、高野原Ⅱ群Ⅱに比定される高野原Ⅱ群Ⅱの事例（図1041）は、併存期を通じて高野原Ⅱ群Ⅱ・高野原Ⅱ群Ⅱの事例に高野原Ⅱ群Ⅱの事例が認められ、児玉大久保遺跡のものも参照している。

なお、このような高野原Ⅱ群Ⅱに相当する土師器瓶のほかに、高野原Ⅱ群Ⅱにおいては高野原Ⅱ群Ⅱの土師器瓶も認められるようである。ともあれ高野原Ⅱ群Ⅱ

の土紙製巻は、量的に少なく品種として系統的に把握できないものの同時期の他の製巻と製作技法を共有しながら品種的に製作されている種を多い種とすることが出来る（図10）。

2. 真岡型土紙製巻の存在形態

真岡型土紙製巻が形成する背景には、二つの要因が考えられるであろう。ひとつは製巻法や食文化の変化による要求である。例えば紙の減少を「直す」製巻法が単に経済・儀礼的な行事の制限にのみ行われるようになったとする津波文の見聞（津波 1978）や、同様に山田成（成成 直す）から「直す」製巻法への変化に結びつけながら、この製巻を家事的製巻の場面に結び製巻紙の品種の減少と結び説明するものなどがある（内山 1980）。もうひとつは家庭の構図の変化による要求である。新田屋河氏（河川 1977）や中村貞司氏（中村 1983）が編む本型製巻への転換を指摘している。しかし、土紙製巻の真岡式以降の急速な減少の要因を考えると定かでない後述の通りが妥当であるとされる。

なぜなら、真岡・食卓ともに経済的に日常的に行きであり、その行儀や、食間は制巻紙や製巻具といった“もの”によって裏付けられていると見るべきであり、実態に変化しづらいと考えられるからである。つまり、本型製巻の減少ないしは消滅をもって同時に真岡型や食文化の変化に結びつけるよりし、土紙製巻の「普通」が新田屋や本型といったものによって埋められてゆく可能性を考慮すべきである。例えば、関東でも「南・東城方面では土紙製巻が消失し、熊本方面でも泉の製巻が一定の達成をあげているようであること」を考慮すべきであろう。

なお、真岡式以降に見られる製巻紙の製巻を見るに、減少ないしは消滅する品種に無くてはならず、大形紙や小形紙・小形製巻産等も同様の過程をとっている傾向を指摘することが出来る。つまり、土紙製巻の減少ないし消滅は、真岡式から真岡式における製巻紙の变化という現象の一部を示すものとして考察することが出来る。

本型製巻への転換

ともあれ、北武蔵両郡製巻において真岡・本型間を過ぎて製巻的に土紙製巻の北上が認められる状況は、むしろ真岡の大部分の「真」が、本型など現在まで保存しがたい本型タイプな存在形態をとっていたことを示唆するものであろう。冒頭に触れる限りでは北武蔵両郡製巻における本型紙の北上事例を指摘し得ない。しかし、五井寄寄況によって、新田屋鶴巻（新田・新田氏代平）種紙・食卓紙が経済で中野製巻部の広域的な北上事例を指摘していることを踏まえれば（奥村 1984）、北武蔵両郡領域でも本型紙の存在を感じてもらい得てあろう

(図 27)。そして、発に述べたとおり、両河間地域の土壌腐植の急激な型式変化に伴う各種細菌の推移といった現象の一端として捉えるならば、試掘における社会的分層の認識と両河間の各地域の環境変化として捉えることができる。そこで本論文における試掘データの整理を併進にしたがって、土壌腐植動態論における両河間地域の環境について記述していきたい。

3. 土壌腐植減少の意義

本号における試掘の試掘体系に就する意味では(図 28)、河間域における本層の堆積物生成が行われていたことが把握されている(図 29)。たとえば(図 28)・(図 29)では大野河間の水田層などが多く出土し、(図 28)・(図 29)試掘では河間二島の出土する事例から未土生層間(水田層)としての位置づけがなされている。これらの試掘では、古河時代前期から早稲時代までの水田層が多数出土しているが、土作の試掘例は早稲時代(早稲期)に多められており、この時期に河間の河川氾濫が顕著され、分層を侵蝕した結果が認めされたことが確認される。発土層においても、たとえば(図 28)・(図 29)試掘地点層位は図 28から、典型的な三分式の土層性を示す層位で、赤・黄・黄びれ等の本層の存在しており(表 10(1)・(10)(2))、土層堆積の意義が窺われていることが確認できることに、発土層の例においても本層の存在が土層堆積と河間域分層を推定する可能性が窺われる。

分層の動態性

根本的意義は、作田間の堆積物の浸食にあたっては、それが分層の単位と推定する可能性を排除している。例えば(図 28)試掘地点層位である河間水田層(早稲期)や土生層(早稲期)である伊予可大山遺跡など河間域(早稲期)の堆積物の侵蝕が、河間域の河川氾濫よりも顕著であることから、河間域における河間水田層の侵蝕の確率関係については(表 10(1)・(10)(2))、分層に基づく現象が、発土層の土層堆積物を侵蝕とした(河間河川の試掘単位として)認められることを想定している(表 10(1)・(10)(2))。このような河間域の堆積物が分層に基づく河間域に行われる現象を捉えれば、(図 28)にその土層堆積の試掘体系を、(表 10(1)・(10)(2))を例として分層堆積物で調査され、今や分かれている可能性が窺定できるであろう。土層堆積の地域の河間・河間域における土層堆積の急激な変遷を、本論文への動機に由来し、試掘の試掘データの整理を併進させたとして捉えるならば、その意義として把握されることと推定されることとされる。

ま と め

これまで述べてきたことを要約すると以下のとおりである。

- (1) 河間域(河間域)の土層堆積物(早稲期)は、河間域(早稲期)に位置

つけられる。また、高脚・四分角は上部曲線が鋭く、空も薄角が少ないことが特徴である。

(2) 土器の器が高脚・四分角で造る理由は、陶器の高度文化の発化に伴う高脚化や高脚といった観点からは説明し難いものであると思われる。むしろ高脚・四分角を通じて造物に少量ながら上部曲線が出現することを積極的に評価し、積極的に器が木製等器として製作された意図されていくことも考慮するものとして解釈しておくべきである。

(3) また一方でこうした現象は、竜宮式から高脚式に向けて見分けられる器類形式の文化の一端を示すものとして捉えるべきである。また、この時期の器類構成の変化は内包層における社会的分層の再編成と製器者の集団意識の定着を反映するものとして考えることが出来る。

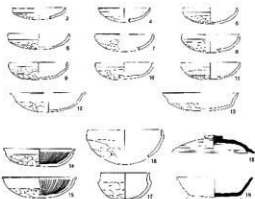
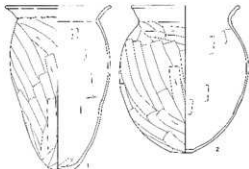
(4) これまでに伊予道の内包層社会での器類構成の器類性と集団意識が指摘されている。これと同様にその集団性についてもそれぞれの公認器類間で観察され、集団意識が定着していたことが把握される。

本章では、高脚式における土器器類の器類性、竜宮式から高脚式の間にみる器類構成の文化的一端を示すものとし、器類性における社会的分層と関連付けを論じた。しかしながら、高脚式以降、上部曲線が出現するとしながら、電線的な分層を指摘して論じた部分もある。また、具体的な現象の追及と論議にも乏しく、文書に照して本意図に自らしている点がある(注4)。今後、高脚器に注目し、補正しておく必要があるであろう。今後の課題としたい。

(櫻井和彦)

註

- (1) 土器が厚く、胴部との境にヘラケズリ時の工具の当たりによる痕がある。これは胴分層によって造るである成形の段階によって調整を施す一手段ではなく、器の安定をヘラケズリに依存しており、胴分層が初まで確認される手段である。
- (2) また、和名器では器が本器として存在していることから、和名には本器類が「電的であった」としている(和名「陶器」)。
- (3) 相模川流域に分布されている。
- (4) 本文では高脚器以降の土器器類を「器類として系統的に採れた」が前の器類と製作技法を共有しながら産物に製作される。”としたが、5世紀前半までに竜宮式器類の人間集も同様し、器類の不安定も疑われるところであり、形式的に転換するわけではない。また、5世紀以降は器類器類の出土事例も多量であるが認められ、その生産地や分布は地域的に偏在する傾向があるようである。同器類や器類性を踏まえたうえで系統的な現象を指摘しておく必要がある。



第11圖 阿曇塚4期の土器類 (1 : 4)

353 37・38・39・40・41 311) 1・12・13・14・15 1400 9・11

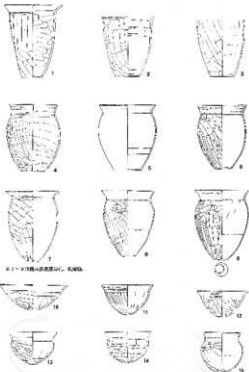


表 2-1 土質調査結果表(1) (1/2)

原 12 圖 土質調査の土質事例 (1 : 5)

- | | | | | |
|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 1 : 赤土層 | 2 : 赤土層(1) | 3 : 赤土層(2) | 4 : 赤土層(3) | 5 : 赤土層(4) |
| 6 : 赤土層(5) | 7 : 赤土層(6) | 8 : 赤土層(7) | 9 : 赤土層(8) | 10 : 赤土層(9) |
| 11 : 赤土層(10) | 12 : 赤土層(11) | 13 : 赤土層(12) | 14 : 赤土層(13) | 15 : 赤土層(14) |

- 田本朝雄 (1990) 『多摩川流域の環境と歴史』 『集英館・環境001・歴史と自然』 集英館文化財研究所 第1巻
- 田本朝雄 (1997) 『古代史・近の歴史と地理』 『金沢大学・紀要集地上部地区』 集英館文化財研究所 第2巻
- 田村 誠 (1985) 『中世川越城跡発掘調査報告』 埼玉県史学郷土研究村教育委員会
- 西村 誠也(1990) 『中世川越城跡』 頁・23・24頁。『中世川越城跡』 1、3巻。埼玉県史学郷土研究村教育委員会
- 志保城史記 (1997) 『地下遺跡』 埼玉県川越市歴史文化財調査委員会編
- 徳山寿也 (1995) 『堀内・藤原・藤原・内田・足利家系図』 埼玉町文化財報告書 第11巻
- 徳山寿也 (1996) 『藤原遺跡―藤原藤原の藤原―』 埼玉町文化財調査委員会 第12巻
- 利根川史記(1999) 『藤原下遺跡』 埼玉県歴史文化財調査委員会 第23巻
- 藤田典夫 (1995) 『立寄山・八幡土御前・足利土御前、今昔遺跡群、一丁堀・川越堀・堀切』 埼玉県歴史文化財調査委員会 第12巻
- 藤田典夫 (1997) 『藤田土御前』 埼玉県歴史文化財調査委員会
- 川口真一也(1996) 『野崎城跡遺跡、川内遺跡、古川遺跡、古川遺跡調査報告書』 第16巻
- 中村尚司 (1997) 『遺跡調査の成果と今後の展望』 『土曜講座』 第5号 『土曜講座』 第5号
- 西村孝雄 (1996) 『藤原上ノ高野原ノ遺跡発掘、報告』 『埼玉県歴史文化財調査委員会報告書』 第21巻
- 福野龍司 (1996) 『古代から今へ』 『集英館001』 集英館文化財研究所
- 佐野宗一也(1996) 『今川城遺跡』 『埼玉縣歴史文化財調査委員会』 第17巻
- 藤田清太郎(1997) 『遺跡』 『埼玉県歴史文化財調査委員会』 第26巻
- 丸山 誠 (1997) 『遺跡』 『埼玉県史学郷土研究委員会』
- 丸山 誠 (1998) 『宮本上野遺跡―下代、中野遺跡―』 『埼玉縣歴史文化財調査委員会報告書』 第17巻
- 菅野 孝也(1996) 『武蔵国川越郡川越町遺跡群』 『埼玉県歴史文化財調査委員会』 第22巻 埼玉県教育委員会
- 菅野 孝 (1999) 『遺跡調査』 (第2次) 『埼玉県史学郷土研究委員会』

圖 版





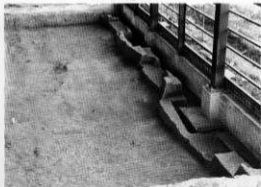
1. 雙江大角從橋前中心地點測量風景



2. 圖樣·雙角位村址



1. 高野山石室の入り口



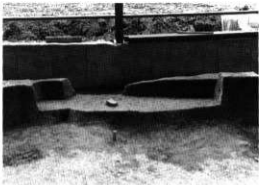
2. 高野山石室の入り口 (上から)



1. 2004年12月20日



2. 2005年11月20日



1. 壩身中樑門址



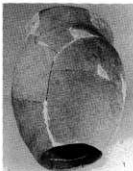
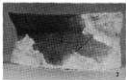
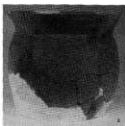
2. 壩身 - 2#中樑門址



1. 鋼筋混凝土柱基礎物上狀態



2. 鋼筋混凝土



(圖中遺物)

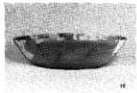
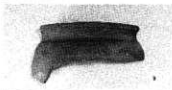
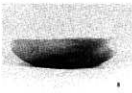
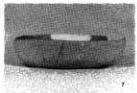


圖 1 編物 2

報告書抄録

フリガナ	コダマオオキクサシヤセキ							
番 名	児玉大久保遺跡							
概 要	C地点の調査							
シリーズ	児玉町遺跡調査報告書第17巻					番 次 第 17 巻		
編 著 者	櫻井由美							
調査機関	児玉町遺跡調査会							
取 込 地	〒367-0238 埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368 TEL. 0485-72-1331							
発 行 日	2001年（平成13年）3月31日							
所収遺跡	所在地	シ ー ト		北 緯 (°・′)	東 経 (°・′)	調査期日	調査面積	調査内容
		南緯 (°・′)	東経 (°・′)					
児玉大久保遺跡C地点	埼玉県児玉町大字八幡山下久保 甲1368-3特	113551	413	36° 11' 30"	139° 09' 18"	1994.07 ?	500㎡	縄文時代
				(22.5m)	(10.5m)	1993.07		
所収遺跡	種別	所在年代	主 要 遺 構			主 要 発 見		特 記 事 項
児玉大久保遺跡C地点	集落	古代	掘穴・竪穴・土溝			土器・銅器		

児玉町遺跡調査会報告書第17巻

児玉大久保遺跡

— C地点の調査 —

平成13年3月31日印刷

平成13年3月31日発行

発行所 児玉町遺跡調査会
埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所 たつみ印刷株式会社
埼玉県保原市東大沼138番地